

## 論 文

# パーリ語 *mama* 派生語と無／

# 非我思想の定型句に見る無所有について

大谷大学大学院

稲 葉 維 摩

## 問題と解決

古代インド出家修行者が財産や家族などあらゆるものを捨てて、無一物の生活を行うことは周知の通りであろう。執着の対象となる所有物を捨てて隠遁生活を送ることは、他ならぬブツダが良い例であるように、出家者共通の徳目であった。このような無所有の実践に関して、出家修行者の間に共通基盤の存在することが先行研究によって確認されている<sup>1</sup>。ではそのような出家者達の共通基盤を背景として、仏教はどのように展開したのか。初期仏教の思想史に関わる重要な事柄であるにも関わらず、これ以上の研究はされていないように見える。この点を明らかにするために、本稿では、韻文經典における所有の問題の中心的語彙である *mama* 派生語と、散文經典における無／非我思想の定型句を検討する。そして、先行研究に指摘される共通基盤から出発した無所有の実践が、仏教において無／非我思想に展開したことを指摘する<sup>2</sup>。

## 韻文經典における *mama* 派生語

本稿に言う *mama* 派生語は、一人称代名詞属格単数 *mama* から派生して作られる語を指す。韻文經典においては次の語が確認される：*mamāya-ti* (denominative, Sn 8x, Dhṛ 1x [= Sn], Th 2x; AiGr III 446), *mamāyita-* (past participle), *mamatta-* (<*mamatva-*, JB *mamatvin-*,<sup>3</sup> abstract noun, Sn 4x, Th 1x [= Sn]; AiGr

III 442, II-2 715), *a-mama-* (adjective, Sn 5x, Th 1x, Ud 3x, Ja 3x)。 *mama* 派生語は属格に由来するため、所属・所有の意味を表す。動詞形 *mamāya-ti* 「私／自分のものにする」は、あるものを自分の所有物にする執着や行為を表す。過去分詞形はその結果、執着したものや手に入れたもの、即ち対象を表す。以下、重要と思われる例をあげ、韻文経典では無常なものに対する執着を捨てるという観点から無所有が説かれていることを示す。

(1) a. では死に際して、渴愛を離れていない者の苦が描かれる。 b. では、 *mama* 派生語の具体的な内容は特定されえないが、文脈上、自分のものとして執着した対象が死によって失われるという苦を読み取ることはできる。そして苦を離れるために、生存への執着をしていない者の実践として、所有の放棄が示される。

- (1) a. Sn 776 *passāmi loke pariphandamānaṃ pajamaṃ imaṃ taṇhāgataṃ bhavesu/*

*hīnā narā maccumukhe lapanti avītataṇhāse bhavābhavesu//*

私は見る、世間の中でのたうちまわっている者を、即ち、諸々の生存の中で、渴愛にとらわれたこの生き物を。

劣った人々は死の入り口において嘆いている、即ち渴愛を離れていない者達は、次々の生存において。

- b. 777 *mamāyite passatha phandamāne macche va appodake khīṇasote/ etam pi disvā amamo careyya bhavesu āsattim akubbamāno//*

私のものにしたものの中で、のたうちまわっている者達を見よ。流れの尽きた少ない水の中にいる魚達ようである。

それをも見て後、私のものなく、行うべきである、諸々の生存への執着をしていない者は。

(2) a. 人間は必ず死に到る、 b. 取得物<sup>4</sup> (*pariggaha-*, 財産等)は無常であり、 c. 必ず失われる、 d. そのような取得物に貪欲である者には苦の尽きないこ

パーリ語 *mama* 派生語と無／非我思想の定型句に見る無所有について

とが説かれる。苦を離れる実践として、b, c, d. では出家し、取得物を捨て、自分の所有物として執着しないことが示される。*pariggaha-* と *mamāyita-* との言い換えが b, d. に確認されるため、意味内容としては具体的に財産等が読み取れる。

- (2) a. Sn 804 *appaṃ vata jīvitaṃ idaṃ oraṃ vassasatā pi miyyati/  
yo ce pi aticca jīvati atha kho so jarasā pi miyyati//*  
ああ、短い、この生命は。百年より少なくとも死ぬ。  
もし、〔百年を〕超えて生きていても、その場合、彼は老いによ  
ってもまた死ぬのだ。
- b. 805 *socanti janā mamāyite na hi santi niccā pariggahā/  
vinābhāvasantam ev' idaṃ iti divvā nāgāram āvase//*  
人々は私のものにしたものに苦悩している。というのも、取得物  
は常住ではないから<sup>5</sup>。  
ここには分離があるだけだと見て、家にいるべきではない。
- c. 806 *maraṇena pi taṃ pahīyati yaṃ puriso mama-y-idan ti maññati/  
evam pi viditvā paṇḍito na mamattāya nametha māmako//*  
人が「これは私のものだ」と考えるもの、それは死によっても捨  
てられる。  
このようにも知って、賢者は、即ち私に属する者は<sup>6</sup>、私のもの  
と考えることに傾くべきでない。
- d. 809<sup>7</sup> *sokaparidevamaccharaṃ na jahanti giddhā mamāyite/  
tasmā munayo pariggahaṃ hitvā acariṃsu khemadassino//*  
苦悩と悲嘆とねたみを捨てない、私のものにしたものに貪欲であ  
る者達は。  
それ故、ムニ達は取得物を捨てて後、安全を見ながら歩き回っ  
た。

荒牧(1985, 1988)はブツダの根本思想として、(3) a. に説かれる *nāma-rūpa-* の所有の否定を指摘する。

- (3) a. Sn 950 (= Dhp 367) *sabbaso nāmarūpasmiṃ yassa n' atthi mamāy-  
ītaṃ!*

*asatā ca na socati sa ve loke na jiyati//*

あらゆる側で、名称と姿に対して<sup>8</sup>、彼には私のものにしたものがない<sup>9</sup>、

そして、ないことに苦悩しない、そういう者は世間の中で滅びないのだ。

- b. 951 (cd=Th 717cd) *yassa n' atthi idaṃ me ti paresaṃ vā pi kīñca-  
naṃ!*

*mamattaṃ so asaṃvindaṃ n' atthi me ti na socati//*

彼に「これは私のものだ」という、或いはまた「他人のものだ」ということが何もない場合、

その者は私のものと考えることを手に入れていないので、「私にはない」といって苦悩しない。

(4) では身体が所有の対象にされる。

- (4) Th 575 *ye 'maṃ kāyaṃ mamāyanti andhabālā puthujjanā/*

*vaḍḍhenti kaṭasaṃ ghoraṃ ādiyanti punabbhavaṃ//*

眼の見えない愚かな凡夫達が、この身体を私のものにする場合、身の毛のよだつ墓地を彼らは増やし、再生を取る。

以上、韻文經典の中で重要と思われる *mama* 派生語の例を見た。所有の対象は何であれ無常であり、死に際してはあらゆるものを手放すことになる。それ故、無常なものに対する所有意識、執着は苦の原因である。そのような執着

パーリ語 *mama* 派生語と無／非我思想の定型句に見る無所有について

を捨てることが苦を離れるための主要な実践として示されていた。

先に述べたように、これら韻文經典の内容は仏教外の文献と平行関係にあり、*mama* 派生語によって示される無所有の表現は、他文献と一致するものであることが知られている。そのため、所有の問題は出家修行者達の共通基盤に基づくものと考えられる。

## 散文經典における *mama* 派生語

散文經典では極端にその用例が少なくなるが (*mamāya-ti* M 2x, S 3x ; *mamatta-* D 3x ; *a-mama-* D 1x)、その中、重要と思われる例 (5) では、*mamāyita-* 等、執着を表す語の具体的内容が後に検討する無／非我の定型句で示されている。従って、*mama* 派生語で表される所有の問題が、散文經典においては定型句によって示されていると考えられる。

- (5) S II 94 (=96) *yaṃ ca kho etaṃ bhikkhave vuccati cittaṃ iti pi mano iti pi viññāṇaṃ iti pi, tatra ssutavā puthujjano nālaṃ nibbindituṃ nālaṃ virajjituṃ nālaṃ vimuccituṃ. taṃ kissa hetu. dīgharattaṃ h' etaṃ bhikkhave assutavato puthujanassa ajjhositāṃ mamāyitaṃ parāmatthaṃ, etaṃ mama, eso 'ham asmi, eso me attā ti. tasmā tatra ssutavā puthujjano nālaṃ nibbindituṃ nālaṃ virajjituṃ nālaṃ vimuccituṃ.*

それは、比丘達よ、心とも思考(意)とも識別(識)とも言われるが、それに関して学んでいない凡夫は、離れることに十分でなく、無関心になることに十分でなく、解脱することに十分でないのだ。それはなぜか。というのも、長い間それ(心、思考、識別)は、比丘達よ、学んでいない凡夫によって固執され、私のものにされ、執着されている、「それは私のものである、それは私である、それは私のアートマンである」と<sup>10</sup>。それ故、それに関して学んでいない凡夫は、離れることに十分でなく、無関心になることに十分でなく、

解脱することに十分でない。

改めて、*mama* 派生語の意味内容を指摘する。当該語は属格に由来するため、所属・所有が中心的な意味となる。従って、*mama* 派生語によって表される問題は a. 無常なものを自分の所有物として執着すること（我所執）であり、b. アートマンでないものを私／アートマンと見なすこと（我執）ではない。b. は韻文經典において個別に説かれるため（6）、そもそも所有と異なる問題であったと考えられる<sup>11</sup>。

- (6) Sn 756 *anattani attamānaṃ passa lokaiṃ sadevakaṃ/  
niviṭṭhaṃ nāmarūpasmiṃ idaṃ saccan ti māññati//*

アートマンでないものにおいて、アートマンを誇りとする者を見よ、  
即ち神を含む世間を、  
名称と姿に入り込んだ者を。これが真実だと彼は考えている。

### 無／非我思想の定型句

無／非我思想の定型句は五蘊、十二処、十八界、心意識、見解、五大種等を対象として、經典においては M, S, A にいくつかのパターンで説かれる。その一例（7）、（8）、（9）を見れば、定型句は二つの側面から成ることが読み取れる：個人の構成要素の一つ一つ（五蘊等）が、a. 自分の所有物ではない、b. 私／アートマンではない。

- (7) S I 112 *rūpaṃ vedayitāṃ saññaṃ viññānaṃ yañ ca saṅkhatam/  
n' eso 'ham asmi n' etam me evaṃ tattha virajjati//*

物質、感受されたもの、表象、識別、そして構成されたもの、  
それは私ではない。それは私のものでない。このようにそこで、彼  
は激情を離れる。

パリ語 *mama* 派生語と無／非我思想の定型句に見る無所有について

- (8) M I 138 *taṃ kiṃ maññatha bhikkhave, rūpaṃ niccaṃ vā aniccaṃ vā ti. aniccaṃ bhante. yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vā taṃ sukhaṃ vā ti. dukkhaṃ bhante. yaṃ paṇāniccaṃ dukkhaṃ vipariṇāmadhammaṃ, kallaṃ nu taṃ samanupassitaṃ, etaṃ mama, eso 'ham asmi, eso me attā ti. no h' etaṃ bhante. . . . vedanā . . . saññā . . . saṅkhārā . . . viññāṇaṃ. . . .*

「それを君達はどう考えるか、比丘達よ、物質は常住か、或いは無常か」と。「無常です、尊き君」。「けれども無常であるもの、それは苦か、或いは楽か」と。「苦です、尊き君」。「けれども無常であり、苦であり、変化をダルマとするもの、一体それを観察することは賢明だろうか、『それは私のものである、それは私である、それは私のアートマンである』」と。「そうではありません、尊き君」。…。

- (9) S II 252 *yaṃ kiñci rāhula rūpaṃ atītānāgatapaccuppannam ajjhataṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yaṃ dūre santike vā sabbaṃ rūpaṃ n' etaṃ mama, n' eso 'ham asmi, na m' eso attā ti. evam etaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya passati. . . . vedanā . . . saññā . . . saṅkhārā . . . viññāṇaṃ . . . evaṃ kho rāhula jānato evam passato imasmīṃ ca savīññāṇake kāye bahiddhā ca sabbanimittesu ahaṃ-kāramamaṃkāramānānusayā na honti.*

ラーフラよ、過ぎ去った、まだ来ていない、生じている物質は何でも、或いは自己の内に、或いは外側に、或いは粗い、或いは細かい、或いは劣った、或いは優れた物質は何でも、遠くに、或いは近くにおける全ての物質は何でも、「それは私のものではない。それは私ではない。それは私のアートマンではない」と、このようにそれを如実に正しい理解によって見る。…。このように、ラーフラよ、認識し、このように見ている者に、この識別を伴った身体において、そして外側では全ての印において、自我意識と所有意識<sup>12</sup>と慢心という従い横たわるもの<sup>13</sup>は存在しないのだ。

代表的な例 (9) に基づいて考察すれば、先に見た韻文經典の表現 (1) - (4), (6) と定型句との対応関係は (10) のようになるだろう。従って、個別の問題である (10) a, b. は、定型句において無／非我思想の二本柱としてまとめられたと考えられる。

- (10) a. 無常なものを自分の所有物として執着することの否定 (1) - (4) : “*n’ eso mama*” 「それは私のものではない」。
- b. アートマンでないものをアートマンと見なすことの否定 (6) : “*n’ eso ’ham asmi*” 「それは私ではない」、 “*na me attā*” 「それは私のアートマンではない」。

また、定型句では五蘊 (7), (8), (9) や心意識 (5) 等、専ら個人の構成要素が観察対象となっていた。定型句成立時における仏教の主要な問題は、個人の構成要素に対する我執と我所執であったと考えられる。

## ま と め

本稿では、韻文經典における所有問題の中心的語彙である *mama* 派生語と、散文經典における無／非我思想の定型句を検討した。出家修行者共通の実践である無所有は、韻文經典においては *mama* 派生語を中心に説かれており、仏教外の文献にも一致する所であった。しかし散文經典においては、無／非我思想の定型句の内に我執 (*ahaṅkāra-*) とともに、我所執 (*mamaṅkāra-*) としてまとめられていた。このように、無所有は出家修行者の共通基盤と考えられる表現から出発し、それは我執と個別の問題であったが、仏教において無／非我思想の定型句に展開することを指摘した。

### 略号と参考文献

パーリ語テキストは Pali Text Society 版を用い、略号は *A Critical Pali Dictionary* に従



パーリ語 *mama* 派生語と無／非我思想の定型句に見る無所有について

った。

Āy = Schubring, Walther. 1910. *Ācārāṅga-Sūtra, erster Śrutaskandha*. Leipzig (reprint, Nendeln Liechtenstein : Kraus Reprint LTD. 1966).

ChU = Morgenroth, Wolfgang. 1958. *Chāndogya-Upaniṣad*. Dissertation Jena.

JB = Raghu, Vira and Lokesh, Chandra. 1954. *Jaiminīya-Brāhmaṇa of the Sāmaveda*. Nagpur (Sarasvati-Vihara-Series 31 ; reprint, Delhi : Motilal Banarsidass)

Sūy = Bollée (1988).

AiGr = Wackernagel, Jacob und Debrunner, Albert. 1954–1975. *Altindische Grammatik*, 4 Bde.. Göttingen : Vandenhoeck and Ruprecht.

Bollée, Willem B. 1988. *Studien zum Sūyagaḍa*. Teil II. Stuttgart : Franz Steiner Verlag.

Caland, Willem. 1919. *Das Jaiminīya-Brāhmaṇa in Auswahl*. Verhandelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen te Amsterdam, Afdeeling letterkunde ; deel 19, no.4, Müller (reprint, Wiesbaden : Dr. Martin Sändig oHG. 1970).

PW = Böhtlingk, Otto und Roth, Rudolf. 1855–1875. *Sanskrit-Wörterbuch*, 7 Bde. St. Petersburg (reprint, Delhi : Motilal Banarsidass 2000).

荒牧典俊. 1985. 「Attadaṇḍasutta (Sn.935–954) は「釈尊の言葉」であり得るか」。『日本佛教學會年報』50 : 1–18.

———.1988. 「ゴータマ・ブッダの根本思想」, 『岩波講座 東洋思想』. Vol.8 「インド仏教 I」62–97. 東京 : 岩波書店.

稲葉維摩. 2011. 「初期仏典における (a-) parigraha- について」. 『印度學佛教學研究』60 –1 : 324–321.

櫻部健. 2002. 「無我の問題－ニカーヤの範囲で－」. 『阿含の仏教』57–104. 京都 : 文英堂書店.

中村元. 1993. 「第五章 自己の探求－無我説」. 『原始仏教の思想』I, 中村元選集〔決定版〕15 : 455–673. 東京 : 春秋社.

村上真完. 1980. 「無欲と無所有－マハーバーラタと仏教(一)－」. 『東北大学大学部研究年報』29 : 140–213.

矢島道彦. 1997. 「Suttanipāta 対応句索引」. 『鶴見大学仏教文化研究所紀要』2 : 1–97.

## 註

- 1 所有の問題に注目する先行研究を数点のみ見れば、村上(1980)は主に *Mahābhārata*, *Mokṣadharmā-parvan* を中心として、無常・苦・無欲・無所有等の考え方が仏教やジャイナ教の表現と共通することを示す。荒牧(1985, 1988)はブッダの根本思想として個体存在の所有の否定を指摘し(→(3))、ジャイナ教初期経典との並行文を共通基盤とする。中村(1993)も仏教の最初期には、所有が問題とされていたことを指摘し、韻文仏教経典とジャイナ教初期経典との一致を指摘する。
- 2 さらに詳しく言えば、本稿において、我執と所有の問題(我所執)は文献において混同されることのない個別の問題であることをも指摘する。なぜならばこれまでの研

- 究において、所有の問題は無／非我説の側面として認識されてきたように見えるからである。それは例えば、中村（1993：499）が初期仏典に説かれる無／非我を「アートマン以外のいかなるものをも、『これがアートマンである』とか『これがわがものである』とかいって執してはならぬ」と要約している点や、また例えば、櫻部（2002：81 f.）が「それ（Sn 756 *an-attan* 『我ならざるもの』）は、誤って『われ』『わがもの』として愛恋され染着されているものを指してそういうのである…『我執』『我所執』の超克は韻文經典中に繰り返し説かれているが、それは『我』の存在や『我』の觀念の否定というよりも、（經典の表現でいえば、逆に）我の確立なのである」とまとめている点などからうかがえるだろう。しかし本稿では、我執と我所執の問題は韻文經典の最初期に限らず、無／非我の定型句においても、常に二本柱として存在し続けることを指摘する。
- 3 ヴェーダ文献では JB に *mamatvin-* が確認される：JB 2.128 (Caland 1919：§139) *athaīṣa bṛhaspatīsaḥ. prajāpatiḥ prajāś sasṛjānas sa vyasrāmsata. so 'nnaṃ bhūto 'śayat. tasya sarve devā mamatvina āsan mama mameti*. 「そこで、それがブリハスパティサヴァである。ブラジャーパティとして生き物達を創り出していたが、彼は崩れた。彼は食べ物となって横たわった。それ（食べ物）を全ての神々は私のものと考えている状態にあった、「私のだ、私のだ」と言って」。
- 4 *pariggaha-* 「取得物」は所有行為の対象物、手に入れたものを指す（それ故、*mamāyita-* と言い換えられる、稲葉 2011）。意味内容が読み取れる一例として：S I 93 *dhaññaṃ dhaṇaṃ rajataṃ jātarūpaṃ pariggahaṃ vā pi* (fn. 2：B. *pi*；S 1-3 *cāpi*) *yad atthi kīnci/ dāsā kammakarā pessa ye c' assa anujīvino/ sabbhaṃ nādāya gantabbhaṃ sabbhaṃ nikkippagāminam*! 「穀物、財、銀、金、即ち取得物であるものは何でも、奴隷達、労働者達、使用人達、彼の召使い達は誰でも、全てを持って、行くことはできない、つまり放り捨てて行くものである全てを」。稲葉（2011）に指摘したように、*a-pariggaha-* 「無所有」は古層韻文經典において出家者と在家者とをわけると重要な指標であったけれども、四ニカーヤでは出家者以外の者（梵天やウッタラクルの人々）も無所有であると若干説かれるだけで、ほとんど使用されない。
- 5 無所有の共通基盤に関して参考のため、これ以後、矢島（1997）に基づいて仏教外の文献における並行句をあげる。Sūy 1.2.2.9 cd (Bollée 1988：8, 55 f.) *soyanti ya ṇaṃ mamāiṇo no labbhanti niyaṃ pariggahaṃ*!
- 6 *māmaka-* 「私に属する」、即ち仏教に属すること、仏教を信奉することを意味する (PED s.v. *māmaka-*)：Nidd I 125 *māmako ti buddhamāmako dhammāmako saṅghamāmako. so bhagavantaṃ mamāyati, bhagavā taṃ puggalaṃ pariggaṇhāti*. 「私に属するというのは、ブッダを信奉し、ダンマを信奉し、サンガを信奉する。彼は世尊を信奉し、世尊はその人を囲み取る」；Pj II 534 *māmako ti mama upāsako bhikkhu vā ti saṃkhaṇṇaṃ gato. buddhādīni vā vatthūni mamāyamāno*. 「私に属するというのは、信奉している優婆塞、或いは比丘と呼ばれる者である。或いはブッダを初めとする事柄を信奉している者である」。
- 7 Āy 1.2.5.3 (p. 10.20) . . . *pariggahaṃ amamāyamāṇe* . . .；1.8.3.2 (p. 35.15) . . . *parigga-*

*ham amamāyamīṇe . . . .*

- 8 *nāma-rūpa-* に関して、ここでは正確な意味が決定し難い。しかし、パラレル Sn 861 ab に 950 *nāmarūpe* と *loke* との対応が読み取れるため、意味内容の把握に示唆的と思われる：Sn 861 ab *yassa loke sakaṃ n' atthi asatā ca na socati* 「彼には世間において自分のものが存在しない、そして存在しないことに苦悩しない」。
- 9 Āy 1.2.6.2 (p. 12.7) *se hu dīṭṭhabhae muṇī jassa ṇ' atthi mamāyam*。
- 10 注釈は定型句のそれぞれを渴愛、慢心、見解に対応させる：Spk II 98 *etaṃ mamā ti taṅhāgāho. tena aṭṭhasatataṅhāvicaritā gahitā honti. eso 'ham asmī ti mānagāho. tena nava mānā gahitā honti. eso me attā ti dīṭṭhiḡāho. tena dvāsatti dīṭṭhiyo gahitā honti*。
- 11 *attan-* の用例としては、韻文經典内に数多く見出されるが、その解釈については諸学説に一致を見ない。本稿の目的から外れるため、ここでの言及は避ける。
- 12 *ahaṃkāra-*, *mamaṃkāra-* がそれぞれ我執と我所執を表すことは周知の通りであろうが、両者の由来はこれまで明確にされたことはなかったように見える。所有の問題にも関わる重要語であるため、ここに指摘する。*ahaṃkāra-* は仏教に先立つウパニシャッド (ChU 7.25) に基づく。基本的な意味は「*aham* 音」であり (cf. *hiṅkāra-*, *ca-kāra-*, etc.; AiGr II-1 86, III 456)、ここから「自我意識」に展開すると考えられる：ChU 7.25.1 *sa evādhastāt. sa upariṣṭāt. sa paścāt. sa purastāt. sa dakṣiṇataḥ. sa uttarataḥ. sa evedam sarvaṃ iti. athāto 'haṃkāradēsa eva. aham evādhastāt. aham upariṣṭāt. aham paścāt. aham purastāt. aham dakṣiṇataḥ. aham uttarataḥ. aham evedam sarvaṃ iti*。「他ならぬそれが (*bhūmān-* m. 「大量、豊富」) が下にある。それが上にある。それが西にある。それが東にある。それが南にある。それが北にある。この全ては他ならぬそれである、と。そこでこれに関して、他ならぬ *aham* 音の代置がある。他ならぬ私が下にある。私が上にある。私が西にある。私が東にある。私が南にある。私が北にある。この全ては他ならぬ私である、と」。*mamaṃkāra-* はヴェーダ文献に確認されず、PW を見る限り、仏典が初出と考えられる (PW s.v. *mamakāra* : *Indische Sprüche, Kusumāñjali*)。従って、仏教は新しい語 *mamaṃkāra-* 「*mama* 音」→「所有意識」を用いて、所有の問題を示したと考えられる。
- 13 “*ahaṃkāra-mamaṃkāra-māṇa\_ānusaṃyā*” に関して、それぞれを並列に列挙する注釈書の説明に基づき、*dvandva* 複合語として理解した：Spk II 215 (comment on (9) S II 252) *ahaṃkāramamaṃkāramānānusaṃyā ti ahaṃkāradīṭṭhi ca mamaṃkāratāṅhā ca mānānusaṃyā ca* ; cf. S II 253 *evaṃ kho rāhula jānato evaṃ passato . . . ahaṃkāramamaṃkāramānāpagataṃ mānasam hoti vidhāsamatikkantaṃ santaṃ suvimuttaṃ*。「このように、ラーフラよ、認識し、このように見ている者には、…自我意識と所有意識と慢心とを離れた思考が存在する、即ち様々を乗り越えた、よき、よく解脱した思考が」、Spk II 215 (comment on S II 253) *ahaṃkāramamaṃkāramānāpagatan ti ahaṃkārato ca mamaṃkārato ca mānato ca apagataṃ*, Mp II 206 (comment on A I 132) *ahiṃkāramamiṃkāramānānusaṃyā ti ahaṃkāradīṭṭhi ca mamiṃkāratāṅhā ca mānānusaṃyā ca ti ete kilesā*。